

- 一 日 乙子朔日唐土殿の世では「ウシ」の月を年のはじめとせし故殿の世の元旦なり 本村現在は古老云ふのみ
- 八 日 八日吹さいふこの日風吹かぬと明日大風吹くとて「吹かば吹け吹かねば吹かず八日吹」きとて「トフ、アブラゲ」の汁をつくり食ふ習。近年少なし。
- 十三日 この頃煤拂ひをして正月をむかへる準備をする此の頃歳暮の贈答をなす。
- 十四日 義士會、講演、活動寫眞などあることもあり
- 餅 搗 二十五、六日より各戸行ふ
- 大晦日 門松をかざり砂をまき、神棚、佛壇並に職業の道具等に、鏡餅、密柑など供へ、夜は神棚に燈明をとともす
- そして如何におそくなつても一年中の勘定日として、借のあるものは返済して歩く又各寺院では深夜より曉にかけて百八の除夜の鐘をつく。

## 第六節 民 謡

### 一、子 守 歌

一、ねんねんよくらいよ。川端柳水の流れを見て暮せよ。守と言ふ者、樂の様でつらい。朝ははよからたたきおこされ、晩はおそまで門に立つよ。

- 二、ねんねんよおこらいよ、坊やはよいこじやねんねしな、ねんねのお守はまごへ行つた、お山を越へてお里へ行つた  
お里のおみやげ何もろた、てんでん太鼓に笙の笛
- 三、ねんねんねとねさせる親は、神か佛か親様か
- 四、ねんねこる市、竹田の興市、竹にもたれて七興市よ
- 五、ばあばあばんげの子、日の出に生れた秀さの子
- 六、ねんねんようくおこらいようく
- 七、寒や北風、可愛や子供、賽の河原で屋根葺きやこわす。こわしや又積む、積みや又こわす。
- 八、寒や北風、可愛や子供、賽の河原で石を積む、石をつめば鬼が来てこわす、こわしや又積む、つみや又こわす
- 九、こんなよう泣く子は守やようせぬ、お暇おくれや旦那様。お暇あけたにまごなとゆきやれ、わたしや機屋へくだま  
きに
- 十、ねんねんよう、おこらいよう、ねんねしよねねしよねんねしよ、なんせなくのだねんねしよ、おらがだいじな〇〇  
さん(〇〇の中には其の子の名を入れて歌ふ)
- 十一、もりさ子守さ今度の季はいくら、二貫五百にじより油。(じよりは草履の方言)
- 十二、守とよばるな守さと呼ばれ、守さ若い衆の花嫁御
- 十三、山はやけても山鳥やたぬ、子ほご可愛い者はない。

十四、ねんねころ市、竹田の興市、竹にもたれてなく興市、ねんねころくねんねしよ、もたれてゐる子はお懶口よ、泣いてねる子はたわけだよ。

十五、日の出に生れた男の子、ばんげに生れた女の子。

十六、西のお山にちんばが見える、笠が見えたりかくれたり。

十七、ばあばあばんげの子、朝早う起きて、お日の出拜んで、そ、豆きりきりしよ。

十八、ばあばあばんげの子、朝早う起きて臺所はいて庭はいて、そ、豆きりきりしよ。

## 二、手 毬 歌

一、向ふ通るは山四郎さじやないか、鐵砲かついで小脇差して、西のお山へ雉子うちとめたに、雉子のもぎりにお茶屋へはいつて、お茶は新茶でのみともないが、この姉様いくつでござる、姉は二十三妹は二十、妹ほしさに立願かけて、伊勢へ七度熊野へ八度、お天道様へは月まわりく。

二、やつさんくいもやつさん、お芋は一升いくらだえ、お芋は一升二十八文、餘り高いにまけとくれ、お前のことならまけてやる。一、二、三、四、五、六、七、八、九、十。

三、大黒様といふ人は、一に俵をふんまへて、二でにつこり笑つて、三に盃手に受けて、四つ世の中よい様に、五つ出雲の若るびす、六つ無病息災に、七つ何事なげに、八つ屋敷をひろめて、九つここで家を建て、十でとんとん治

まつた。

四、わしのてんまり絹糸でんまり、つけばよごれるたばへばひかる、川に流せば柳にかかる、柳きりきりまつかざり。

ヒイ、フウ、ミイ、ヨウ、イ、ムウ、ナア、ヤア、コ、トヲ。

五、おらん裏でよう鳴く鳥が、ぼつとたつてあじまの城へ、あじまの城から桑名の城へ、桑名の城から高い城へ、一丈と上つてもまんだも高い。二丈と上つてもまんだ高い、三丈と上つて東を見ると、よい子よい子が三人通る。一でよい子が糸屋の娘、二でよい子が二の屋の娘、三でよい子が酒屋の娘、酒屋の娘は伊達しやでござる。だてもだてだが一番だてだ、とつつさの帯を腰うち巻いて、かかさの帯をたすきにかけて、本町横町をちやりちやりとちやりちやりと。

六、おらん裏のちしやの木にく、雀が三羽まつたく。一羽の雀が言ふことにやく。夕ごつた花嫁御花嫁御、花の座敷にすはらせてく、お茶漬三杯汁四杯汁四杯、それでもまんだ足らんとてく、ほろりほろりと泣かしやんすく、何も悲しよはないけれぐく、赤いべいに血がついた血がついた、血でも何でもないけれぐく、元のか、さの口べにじやく。

七、げんげんほろほろなぜなくやく、親もあるが子もあるが、たつた一人の子娘を、おたかにとられて今日七日、今日七日、七日と思へば四十九日、四十九日の寺参り寺参り、寺へまいりの袴を、裏のばばさに借りに行つた、借に行つた、あるものないとしてかさなんだ、お腹立ちや、腹立ちや、そうも腹が立つならば、裏の川へ身を投げよ、身

を投げよ、身は身で沈んだ、小袖は小袖で浮んだ浮んだ。小袖のたもとに子が一人、男の子ならやれ拾へ女の子なら押流せ押流せ、女の子だとてそうやるな、くわせて飲ませて遊ばせて、あいまに小銭も使はせて、山のかたりや縁につけよ縁につけよ。

八、どんとんたたくは誰さんだ、本町横町の儀兵衛様、今頃何しに來たのです。雪駄がかはつてかへに來た、お前の雪駄は何雪駄、私の雪駄は京雪駄、京の糸屋の善四郎は、一人娘にもちかねて、長持七へに帯八筋、縮緬足袋も十二足、羽二重足袋も十二足、これ程仕立ててやるものに、ひよいと去られて來た時に、頭をすつて衣着て、西を向いては南無阿彌陀、東を向いては南無阿彌陀、

九、儂のてんまり絹糸かかり、紙に包んでこよりにしめて、川へ流せば柳にかかる、柳きりきりまつかがりく、  
十、きつこいぎじよ汁、鰻の蒲焼、焼けたら持つて來い

### 三、お 手 玉 歌

一、下してガイチョ、お一つお一つ下してオツサラへ、お二つお二つ下してオツサラへ、おしみに下してオツサラへ、お手上げお手上げあげた、お手はお手はさ挟んでオツサラへ、おちりこおちりこちりいてオツサラへ、お左お左ひだり、てつつきしようつきオツサラへ、ねこはちすましてオツサラへ、でんでん虫々むしオツサラへ、お招きお招きまねいてオツサラへ、おばさまくばあさオツサラへ、並べたオツサラへ、お膝、お袖、お袂お手手ついてオツ

サラへ、大橋くぐらんせくくぐつたオツサラへ、高塀越しく越いたオツサラへ、一ぺんとんきり二へんとんきり三ぺんとんきりきりくくオツサラへ。

二、一番初めは一宮、二は日光の東照宮、三は佐倉の宗五郎、四は信濃の善光寺、五つ出雲の神社、六つ村々鎮守様、七つ成田の不動さん、八つ八幡觀音さん、九つ高野の弘法さん、十を東京の泉岳寺。

三、うしろのせ、おんせのせ、おさかおかでさん、やすやでさん、すやまかせのかうぢもち、おかごに乗るのはいくらです、五百ですもう少しまからんか、まからんかね、お前のことならまけてやる、一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、

四、青葉しげちゃん、昨日はいろくお世話になりました。私今度の日曜日、東京の女學校へまいります。皆さん體を大切に、なされて下さい、頼みます。

五、おのせ、おひと、おひいとく、おふうたくおふうた、おみつおみいつおみいつ、お四つお四つく、おろしくうくみく、はきだいてとつてん、まんねきまんねきく、おさわらびの玉よい玉、この玉よい玉おつさわら。

### 四、手 拍 子 歌

一、せつせつせ、はらりとせ、一て橘、二で燕手花、三で下り藤、四で獅子ぼたん、五ついやまの千本櫻、六つ紫桔梗に染めて、七つなりてん、八つ山吹。九つ小梅を海老茶に染めて。十を殿様葵の御紋、竹に雀は仙臺さんの御紋

## 五、遊 戯 歌

- 一、なかの中のこう坊さん、なんぜ脊が低いの、親の日にと、(魚)くつて、それで脊が低いの、一升鍋でこうろごろ、二升鍋でこうろごろ、三升鍋でこうろごろ、四升鍋でこうろごろ、五升鍋ぶち割つた。
- 二、開いた開いた何の花が開いた、げんげの花が開いた。開いたと思つたら見る間につぼんだ、つぼんだつぼんだ。何の花がつぼんだ、げんげの花がつぼんだ、つぼんだと思つたら見る間に開いた。
- 三、坊ちゃん坊ちゃんごへいきやあす。たんぼへ稻刈りに、儂もつれてつて、あんたが來るとじやまになる。はりたほせはりたほせ。
- 四、さんごの水はさうやつてくむじや、つるべかたげてこうやつて汲むじや。
- 五、見えたく、きなたが見えた。××さんが見えた、きなたのうしろ、××さんのうしろ、いゝえ、○○さんのうしろさうだ。
- 六、此處は何處の細道よ、天神様の細道よ、一ぺん通して頂戴な、用の無い者よう通さん、行きはよいが歸りが怖いよ
- 七、達磨さんく、睨ッこしませう、今年の子丹は良い牡丹、笑ふと鬼よ、オツプノ
- 八、大かん小かんごの子が欲しや、××といふ子が欲しや、何食はして置きやる、砂糖豆、小豆、そりやちと毒よ、一の膳でよぼか、そりやちと毒よ、二の膳でよぼか、そりやちと毒よ、三の膳でよぼか、そりやちと毒よ、鯛の骨無

しいかとして汁呑ましよ、何になつて行かう。××(鳥の名)になつてお出で。

## 六、天候動植物に對して唄ふ歌

- 一、つぼごんつぼごんお彼岸参りにいこまいか、鳥といふ黒鳥が、足つゝき目つゝき、それでわたしはようまゐらんはね。
- ほーほーほつたるこい、あつちの水は苦いぞ、こつちの水は甘いぞ。
- ねぎくはた織れてふてふくだまけ。
- 蝙蝠來い來い、草履取らしよ。
- お月さまいくつ、十三七つ、そらまんだお若いの、お馬に乗つて、じゃんこく。歸迄。(お馬に乗つてばかばかお月様)。
- お月様こさまお前さんの前に卵がいくつ、十三七つ、それだれふんだ、おすてがふんだ、おすてはごへ行つた、油買ひに茶買ひに、油屋の門で、ちつてころんで、赤い禪なげだいた
- 七、つくつく坊主つく坊主、頭すつて出さつせ。
- 八、鳥はカアカア勘三郎、雀はチュウく忠三郎、とんびは戸山の戸叩き。
- 九、蝙蝠々々、儂の口がさ治さんと、お前の子取つて食つてしまふぞ。

- 十、チユウく鼠の棚探し棚から落ちて腰打つて、浅井の林平へつり込んだ。  
 十一、いたく、たほこり落した。  
 十二、とんびく、舞ひくしよ、あさつての市に、豆買つてほうばらしよ。  
 十三、雁々後のやつ先になれ、先のやつ後になれ。

## 七、人に對して唄ふ歌

- 一、おらんか、さま蜂屋でござる、蜂にさされて山程はれて、奥の座敷でねてござる。  
 二、わたしの影になる者、ぼつこもつて乞食せよ。  
 三、あの嫁さんい、嫁さん、ねんね抱へてすつぽんぼん、もう一つおまけにすつぽんぼん。  
 四、腹が痛けりや吉さと寝やれ、吉さき薬、腹薬。  
 五、負けて逃げて行く畑鼠、おんぼ切られてチユウチユウ

## 八、石つり歌

- 一、ヨホーエー時のーチーヨライ、浅間の神社ーア、ヨホーエー子供のーチ守りーイ神なーよ。  
 二、ヨホーエー高い山からーアーヨライ、谷底見ればーア、ーヨホーエー瓜や茄子のーチ花ざかりー。

なアよー

- 三、ヨホーエー三度笠ア、ヨチー、あぬけて被れーエーヨホーエーお顔がーアー見たうござるーなーよ。  
 四、ヨホーエー壁勝五郎ーチーヨチー、車に乗せてーエー、曳く初花はーアー箱根山なーアよ。  
 五、ヨホーエーめでたくのーチーヨライ若松様よーチー、ヨホーエー枝も榮えてーエー葉も茂るーなーよ。  
 六、ヨホーエー來るかくーとーチーヨチー、濱へ出て見ればーアー、ヨホーエー濱の松風ーエー音ばかりなアーよ。  
 七、ヨホーエー箱根八里はーアーヨチー、馬でも越すがーアー、ヨホーエー越すに越されぬーウー大井川ーなーよ。

## 九、其 他

- 一、伊勢へ参つたら、朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参宮。(伊勢音頭)  
 二、伊勢は津でもつ津は伊勢でもつ、尾張名古屋は城でもつ。(伊勢音頭)  
 三、目出度目出度が三つ重りて、鶴が御門に巢をかけた。(木遣歌)  
 鶴が御門に何といつてかけた。御家繁昌と云つてかけた。  
 四、伊勢へ参つたら朝熊を殘せ、朝熊頼りに又参る。  
 五、岐阜は良いとこ金華山の麓、おだの蛙が寝て聞ける。  
 六、恐ろしいぞや前夜の清水、死んだお菊がばけて出る。

- 七、儂の兄弟七人ござる、江戸と大阪と伏見と奈良と、伊勢と神戸と松坂と。
- 八、縁じや縁じやと云つて連れて来て、何が縁じやよ、土塵じやわい。
- 九、死んで花實が咲くならとつさ、飽が森には花が咲く。
- 十、盆よよと盆待ち兼ねて、今日はお盆の十六日よ、朝からお山の萎れ草、萎れた草をぎんぎと刈れば、草刈鎌の柄が折れた、折れたら何じや曲つたら何じや、世間に鍛冶屋はないものか、世間に鍛冶は六軒ござる。六軒鍛冶屋に皆打たしよよ。
- 十一、盆が来たとて何嬉しかろ、帷子はなし帯はなし、帷子もある帯もあるが、可愛がつてくれる親がない。
- 十二、正月三日盆三日、盆より正月え、事じや、木履の齒の様な餅食つて、雪より白い飯食つて、木皮の様な魚添へて、赤いべい着て羽根ついた。
- 十三、今泣いただあれ、だんなさんの猫よ、おれもちいと泣いたらか、ニヤアゴよ。
- 十四、今泣いただあれ、山の坊主の泣き笑ひ、いたちにぼわれてキヤツ〜キヤ。

## 第七節 言ひ習はし

次に掲げる言ひ習はしは本村に於ける重なるものであるが、これはひとり本村のみならず、尾北の町村に廣く言ひなら

されてゐるものが多い。

- 一、夜爪をきると狂人になる。
- 二、三りんぼうに家をたてると倒れる。
- 三、足袋をはいてねると出世が出来ない。足袋をはいてねると親の死に目に會へない。
- 四、着物の繫糸をとらずに着ると狐に化かされる。
- 五、人からだをまたがれると丈が伸びぬ。
- 六、硯へ字をかくと手が上らぬ、お手玉をやると手が上らぬ。
- 七、朝蜘蛛が下ると其の日によいことがある。夜蜘蛛は泥棒の使をする。
- 八、朝蜘蛛が下るとその日に客が来る。
- 九、夜爪をきると親の死に目にあへぬ。
- 十、妊婦が火事を見て體をかくと、生れた兒に赤あざが出来、葬式の時には黒あざが出来る。
- 十一、鍋から物をたべると鍋のやうな子が生れる。
- 十二、夜口笛を吹くと蛇が出て来る。夜ほ、づきをならずと蛇が来る。
- 十三、爪をもやすと狂人になる。
- 十四、食後すぐに寝ると牛になる。
- 十五、蛇に指さすとその指がくさる。